令和５年度　外部評価懇談会議事録

〇日　時　　令和５年９月 14 日　10:00～12:10
〇会　場　　オンライン（Teams）開催
〇内　容　　「学修成果の可視化－アセスメントの再考－」
〇出席者　　（外部評価委員）
川島啓二氏（京都産業大学 共通教育推進機構・初年次教育センター長）
杉谷祐美子氏（青山学院大学 教育人間科学部教育学科教授）
（本学）
島田昌和理事長、福井勉学長、
上村佳世子副学長（教学担当・内部質保証委員長）、川良徳弘副学長（内部質保証副委員長）、亀川雅人副学長、恒吉僚子副学長、金彦叔外国語学部長、藤田邦彦経営学部長、椛島香代人間学部長、神作一実保健医療技術学部長、フェアバンクス香織外国語学研究科委員長、大野和巳経営学研究科委員長・経営学部教務委員長、小栗俊之人間学研究科委員長、濵田悦子保健医療科学研究科委委員長、横田素美看護学研究科委員長、渡部吉昭 GCI センター長、西方浩一教務部長、飯島史朗学生部長、木村浩則学長補佐、藤谷克己学長補佐、新田都志子学長補佐、各学部教務委員長（能間寛子准教授、文野洋教授、中俣修准教授）、橋本博幸法人事務局長、中島弘高統括ディレクター・本郷キャンパスディレクター・法人副事務局長、田中綾子ふじみ野キャンパスディレクター、三俣正治本郷キャンパスディレクター補佐、角田千春本郷キャンパスディレクター補佐、小塩明伸戦略企画・IR 推進室室長、中村光昭学生支援センター長、五十嵐康雄学生支援センター長、東城俊太郎学習支援センター長補佐、本杉直子戦略企画・IR 推進室マネジャー、石村友二郎特任助教兼戦略企画・IR 推進室、須永清美教務マネジャー、山下和宏教務マネジャー、田中真由美教務マネジャー、星野樹教務マネジャー、佐々木稔教務マネジャー、田中孝祐 GSI グループマネジャー、石井賢一郎社会教育マネジャー、紺野多恵マネジャー（記録）

「大学における学修成果の把握と教育の質保証」　西方浩一 教務部長
資料に基づき、全学的な取り組みについて説明があった。
【入学時】
・基礎学力テストの実施。各学部学科の特性に合わせて入学当初の学生の基礎学力を測定し、結果を学科教員・関連する科目担当者で共有し、授業の進め方、クラス分けに活用。
【在学中】
・退学率を PDCA における重要指標として年度末に算出。大学全体、学部学科ごとに退学

率低減に向けた取り組みを実施。
・学修ポートフォリオ（DP 到達度チェック）の実施。2022 年度までは、Teams や Salesforce を使用して学部ごとに実施していたが、2023 年度より、B’ s LINK を用いて全学的に実施。各学年で学んだ科目の GPA を DP と紐づけて、その到達度をレーダーチャートで学生が可視化できるようにしている。その可視化した状況を学生自身が振り返り、今後どう活かしていくか、その結果から次年度の目標（学習計画）を立案する。教員は目標を確認し学生へフィードバックする。
・アセスメント・ルーブリック評価の実施。学部学科ごとに内容を選定。各学年で学修した内容をアセスメントし、到達度を図るとともに教育指導に役立てている。
・PROG テストを外部評価として実施。結果については、教学 IR と連携し、分析を行い、教育改善の検討材料としている。
・学生満足調査（学修状況調査）の実施。授業満足度と学修環境満足度を調査。実施率の確保が課題となっている。
・公開授業の実施。年 1 回、各学部ごとに公開授業行い、保護者の方のアンケート結果を教務部で共有し、次年度の教育改善に活かしている。
【卒業時】
・卒業時アンケートの実施。在学中に成長を感じたことをどの DP に該当するか選択式で回答。その他、授業全体の満足度、キャリア支援の満足度、大学のタグラインの認識について調査。
【卒業後】
・卒業生・就職先へのアンケートの実施。卒業 1 年目、3 年目の卒業生の就職先にアンケートを送り回答を得るもの。卒業生および卒業生の就職先からの意見を教育改善に活かす目的で行っている。
【今後の課題】
　さまざまな取り組みは、間接評価、直接評価、量的評価、質的評価のバランスをとって実施されるべきだが、現状は量的評価が中心となっている。各学部学科独自のアセスメントもあり、その部分もしっかり分析していかなければならない。
　また、アセスメントと内容の整理が必要である。3 ポリシーを踏まえたアセスメントを検討し、大学機関学部学科レベルのアセスメントを再考すべきである。学生、教職員の負担軽減の観点からも見直が必要である。

「大学の学修成果の可視化システム」　東城俊太郎 学習支援センター長補佐
　資料に基づき、本学の可視化システムについて説明があった。
システム構築に際し、できるだけ柔軟にかつスピーディーに対応できるシステムであること、学生・教職員が負担なく使用できる簡単なシステムであること、を目標とした。
2019 年は「Excel＋Moodle」、2020 年は「Excel＋Teams」、2023 年から「B’ s LINK」、と段

階を踏みシステムを構築してきた。ようやく可視化する機番が整った。今後は、学修効果の可視化で使用したデータを基にディプロマサプリメントを実装させていきたい。さらに、学修効果の可視化の際に蓄積したデータ以外にもデータ収集できる体制ができあがったデータウェアハウスとして活用し、最終的にはIRへの活用を目指している。

「学生の主体的な学修を前提とした評価方法」　椛島香代 人間学部長

資料に基づき、人間学部の取り組みについて説明があった。

人間学部は特徴を持つ4つの学科で構成されている。何ができるのか。何になれるのか。どう過ごせるのか。学生実態の変化や専門職・対人援助養成をめぐる状況の変化に対応することが必要である。学生の多様性を認め、必要な資質・能力を育てていかなければならない中、さまざまな評価方法を活用し、学生を多面的に理解していこうと学修成果の可視化に取り組んでいる。

児童発達学科では、新たな教育へ対応できる教員、学び続ける教員の養成を行っている。LMSを活用した振り返りの取り組みでは、履修カルテを作成し、自分が教育・保育者養成課程の授業で何を学んだのかを振り返るとともに、今後、どのような学修が必要かを考える手がかりにしている。履修カルテは、1年後期から4年前期までの4年間をかけて育てるものなので、自己課題を適切に見出し、解決するための方向性を自覚できるようになる。また、学生の自己評価から教育改善の方向性を見出すこともできる。

主体的な学修を引き出す評価というのは、学生自身が成長を自覚できる評価である。各学科の特徴に合わせて何が適しているのかを検討していく。

「学修成果指標と教育の実際」　中俣修 保健医療技術学部教務委員長

資料に基づき、保健医療技術学部の取り組みについて説明があった。

昨年度の大学DPの再考に合わせ、4学科のDPを再考した。そのDPを踏まえてCP・APの見直しも行いブラッシュアップを続けている。また、学修成果を可視化するための評価指標の見直しも段階的に進めている。

保健医療技術学部では、多くの評価指標を教育へ活用している。機関レベルでは大学レベルでみた学修成果の達成状況を、教育課程レベルでは学部・学科における学修成果を、科目レベルではシラバスで提示された学修目標に対する科目ごとの学修成果を評価している。入学時から卒業時までの時系列的な学びに沿ったアセスメントを実施し、4年間の学修成果、教育成果の指標として国家試験の合格率・免許取得率がある。また、臨床実習においては、学生による自己評価、実習指導者による評価により、振り返りを行うことができる。

今後の課題は、さまざまな評価指標の中には、教育改善のために明確な目標を持って使用されているものもあるが、対応が十分でないものもあるので、現状の取り組み内容を整理すること。さらに、教員個々の取り組みに対する理解度の促進と学修成果を意識した教育の質向上の視点が必要である。

外部評価委員の講評

川島啓二先生及び杉谷祐美子先生

学修成果の可視化について取り上げられて 4 年目ということで、豊富な実績があると痛感した。先生方の努力、それに費やすエネルギーに敬意を表するとともに、先生方、それをサポートする職員の方のご尽力はご立派なものだ。学修成果の可視化、そのアセスメントは、きちんと教育改善につながるような形に整理していくものである。今回のテーマ「アセスメントの再考」は非常に意義を得たものである。

教務部長の説明では、広範囲なアセスメントの指標があったが、アセスメントの整理が必要である。機関レベル、教育課程レベル、科目レベル、その関係性が問題だと考える。学修ポートフォリオにおいて、GPA 値と DP の紐づけは古典的なカリキュラムマップであり、学修を順序立てて、そのフローで学修成果を見ていくというカリキュラムマップとは、少し違うものであり、考え方の整理が必要である。また、卒業時アンケートは、DP の紐づけが非常にシンプルでわかりやすく、一番重要視すべきではないかと考える。

更に、学生と教員が、これらの意義を理解して取り組んでいるのか、実施率を見ると疑問に思うところもある。学修成果の可視化は何のために行うのか、学生に自覚させるためだけの可視化なのか、その目的に応じて必要な指標や手法は変わる。何を見てどう成長したのか、学生自身が変化を実感したのか、ニーズとどうかみ合っているのか、あらためて検討していくべきである。例えば、学生のアンケート結果に専門科目の勉強をもう少ししておくべきだったとの回答があったが、近年の大学等において、汎用的技能、コンピテンシー、学士力の態度、指向性などが重要視される傾向にあるが、専門分野の内容が身に付いているか、それにとって必要なアセスメントは何かを考え、基本となる成績評価をすることも重要である。

発表された学部においては非常にきめ細やかに対応しており、教育改善にも利用していると感じたが、人間学部の取り組みについては、学科が多様なのでアセスメントの整理は大変だと感じる。学生の主体的な学修の観点では、学生自身の気づきを重要視することがポイントとなる。学生の質が変わってきていることは切実に感じているところで、丁寧さが必要であることはもちろん、学生に気づきをもたらす機会が非常に重要である。履修カルテは、児童発達での取り組みだが他学科へ広げていくことはないのか。

また、保健医療技術学部の取り組みについては、よく整理されていると思ったが、学修成果の可視化のための評価指標で外部評価とは何を指しているのか。これだけのアセスメントを学修成果の評価指標と教育へ活用していくことは、国家試験が絡む学科として厚生労働省からの制約のようなものがあるのか気になった。

一方、システムに関しては、非常に勉強になった。この仕組みはポートフォリオとしても使えるし、IR での活用も検討しているのは非常に進んでいると感じた。また、ディプロマサプリメントを提供していくのであればデジタルバッジを与える等へつなげていくことを考えても良いのではないか思った。

最後に、先生方が感じる学生の変化や手応えは大変重要なデータである。それを共有し今後のアセスメントの整理に活用してほしい。全体のバランスを考えて学生への負荷、先生方への負荷も含め、あらためて検討してほしい。

外部評価委員のコメントを受けて

西方浩一 教務部長

ご指摘のとおり、アセスメントする項目が増え、学生・教職員にかなりの負担となっている。何を目的に、何を学生に可視化してほしいのか、検討して整理しなければならない。

東城俊太郎 学習支援センター長補佐

B' s LINK は本学の教学システムで大学の総合パッケージである。DX の観点から、デジタルバッチも含め、いろいろなものを展開できるようシステムに関して検討している。

椛島香代 人間学部長

学科ごとに取り組んでいるが、学部全体として、どんな指標がいいのか、各学科の DP をきちんと捉える指標になるか、核となる評価項目、評指標を考えていくべきと感じている。

中俣修 保健医療技術学部教務委員長

学修成果の可視化における評価指標の外部評価とは、PROG や GPS-academic 等の大学で準備する以外のものを指している。国家試験が絡む学科では、教育課程について指定規則の縛りを受けているので、それに準じた形で科目をたて教育を行っている。

上村佳世子 副学長

あらためてアセスメントが多いと感じた。これは何とかしていかなければならない。何のために行うのか、学生の気づきのため、教育改善のため、どのように整理するかを考えていかなければならない。

「理事長挨拶」　島田昌和 理事長

川島先生、杉谷先生には、大学教育の進捗について、耳を傾けていただき、的確なコメントをいただき、深く感謝しております。定点観測し、外から見続けてくださる方のご意見は、大学改革にとって極めて重要であります。どうしても出された指針を目の前のものとして捉えがちだが、学生が 4 年間という期間をかけて継続して成長し、かつ前後の学年で比較ができる、中期的な視点で見ていくことが重要だと感じた次第です。

以上